

源氏物語評釈

序文
惣論上

首上

凡例

- 一、本書は、萩原広道（八五―一六六）の未完の源氏物語注釈書である『源氏物語評釈』の版本を翻刻したものである。
- 一、底本は、花宴までを含む十四冊本（刊行年や何番目の重版かは記載がなく定かでないが、「余釈」一四〇ウ・四一才の見開きに「中河の家」の図）を含んでいる、完全版と目される版本セット）を用いた。
- 一、旧漢字・変体仮名は現行の字体に改めた。
- 一、合字は通行の字に改めた。
- 一、仮名遣いは底本どおりとしたが、踊り字「ゝ」「く」などはそのまませず、同じ文字を繰り返した。
- 一、句読点・濁点・記号類を含まない部分については、適宜それらを補っている場合がある。また、ほんのわずかだが、翻刻者による注を付けていることもある。その場合は「※」によって新たな注のあることを示した。
- 一、底本の句読点は、句点（。）だけしか使われていないが、翻刻に際して適宜読点（、）に変えた。底本には句点がないけれども、当然あるべきと思われる部分には、括弧に入れてそれを補った。
- 一、本文と注釈の部では、頭注があることを示す「*」、語釈があることを示す「+」、余釈があることを示す「◆」を本文に付した。
- 一、本文と注釈の部では、頭注スペースを広めに取り、そのページの頭注がその該当本文を含む見開き内にできるだけ収まるようにした。底本は、本文と頭注がかなりずれている場合があつて見にくいためである。
- 一、誤りと思われる部分はそのままとし、変更したり「ママ」の記号を付けたりはしなかつた。底本は、特に濁点を誤っている箇所が多いように思う（例・六ページ上段「必」の送り仮名「ス」、七ページ上段「のたまふましく」等）。
- 一、この翻刻は、引用・リンクを制限しません。基本的に自由に使用していただいてかまわないのですが、ただ、転載の場合だけは必ずご連絡ください。また、もし翻刻の誤りに気づかれた場合は、ご一報いただければ幸いです。（鷺澤伸介）

*（自序）

むかしの物語ふみの、今の世にのこれるものこれかれおほかる中に、この源氏の物がたりばかりめでたきはあらざることは、よよの物しり人たちのいひさだめられたる事なれば、いふも更なるものから、げにやまと・もろこし・いにしへ・今・ゆくさきにも、をさをさありがたかるべき書のままなるに、いまのよにして、そのかみのみやびごとをまなばんには、歌よむにもふみかくにも物のほんとなるべきもとも、この物語をはなちてはあらざりけり。されば、しげ山の奥に入り、水原のふかきをたづねそめられしより、海河のとほしく、花鳥のなざけえならぬなど、やんことなき雲の上人たちのおりたちて、いたづき給へるものどももいとおほく、それがのこれををひろひ、すぢときわけし先達にいたるまで、いみじくものせられたるちうさくどもかぞふるに、およびもそこなはれぬばかりなんありける。さるは、むらさきのあさからぬゆかりたづねて、ふかき色香をたどらむどもがらに、むさし野のかぎりなき道ふみだがへしめじとのわぎなめりかし。おのれあげまきなりしほどより、この物がたりをいたうめで、くつがへりつつあまたたびよむとはすれど、さつきの雨の夜に、ほととぎすのはつね聞たらむこちのみせられて、いとたどたどしきことどもおほかりしかば、むかしよりのちうさくどもをあらまねく引合せ、見くらべて、いくかへりともなくよむこと年ごろになりぬ。さてなん山のはいつる秋の月をはるかにがむるほどにはおぼえて、さすがに手にはとられぬものから、その光のただならぬをげにと見おどるくばかりにはなりにたる。さはいへど、くまぐましき所々はおほかりしを、なほつらつらよみかむがふるに、かのちうさくどももれたるくだりもすくなからず、またそのとかれたることどものいかにぞやうちか

*（久貝正典による序）

「もとありける池山をも、便なき所なるをばくづしかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、つくらせ給へり」といひけむ御すまひよりも、かう年ごろいたづきものして、昔人のこころをこめてつくりおきたるにも、さはあらじとかたぶかるる処々はみなとりすて、後の世の工匠ども、よき断（つぎ）もて力をいれてけづりなせる長押、檼（しほ）あるは闕（けつ）など、よろしとおもふは残りなくとりつけて、つくりかためたる此大殿のしつらひよ、まことに光かがやくばかりにて、かの四町をしめたるにもをさをさおとるまじうなむある。さはいへど、よそめには、便なき所のふつになきにはあらじかとは思はれむも猶おほかめれど、いまおのがうち見るに、何事もあかぬ処なく、おもふやうなるすまひ也と目驚るるは、もはら意の匠のいたりふかき故にぞあるべき。かのもろこし人が集大成などいひけむことさへおもひいでられて、いとめでたしや。「文うつくしうつくりて進士になり給ぬ」とかいへる大学の君にはあらで、このふみいとなみつくれる広道がこふままに、縄墨の正しからぬはかなごとを、筆くひぬらして、初雁のきこゆる夕、浪速の大城にありてしるす。

久貝因幡守正典朝臣

諏善堂主人

*（久貝正典による序） 底本に題名・濁点・句読点・振り仮名・記号類なし。

*「もとありける池山をも……」もとありける池山をも、便なき所なるをば崩し変へて、水のおもむき、山のおきてを改めて、さまざまに御方々の御願ひの心へを造らせたまへり。（少女巻より）

*「文うつくしう……」かくて、大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。（少女巻より）

たぶかるるふしぶしもあるやうにおほゆれば、さる処ごとにひとつふたつこころみにかきつけたることを見て、したしきどもたち、あひかたらひつつ、「これを巻につづりなして板に系らせん」といふ。「いかでか、おふけなく、さることは」などいひて、かいはりつつありけるを、またいとせちにそそのかさされて、つひにはいなびあへず、かくしどけなくもつくる事とはなりぬ。さはれ、よの物識人にとひはかりたることにしもあらず、ただおろかなる心ひとつにおもひかまへてものしつるなれば、かならずひがことはおほからんかし。それが中にも、さばかりつくりぬしの心ふかう物せられたる文の詞どもを、さしいでてさだしこころみ、またむげなるさどび言を、さながらにもくはへてうつしときたるなどは、いとをこがましく、かへりては道ふみだがふるまどはしぐさともなりて、なつかしき色をさへかいけちなんかなど、つみさりとこころなくおほゆれど、ただとくこころえまほしくするをうな・わらはべどもしるべばかりにと、くはだてつるなれば、見ん人さるかたにおもひゆるしてよかし。

嘉永七年正月三日

萩原広道

*（自序） 底本に題名・句読点・振り仮名・記号類なし。濁点は付いている。

*しげ山の…… 順に『奥入』『水原抄』『河海抄』『花鳥余情』『源注拾遺』『源氏物語玉の小櫛』を暗示す。

校正訳注源氏物語評釈首巻目録

惣論上

- 一 源氏物語といふ題号の事
- 一 紫式部の事并日本紀の御局の事
- 一 時世のありさまの事
- 一 此物語称誉の事
- 一 此物語の歌の事
- 一 作者の用意の事
- 一 物語の心ばへ并物のあはれを知るといふ事
- 一 一部の大事といふ事

惣論下

- 一 此物語注釈どもの事
- 一 引歌の事
- 一 准拠の事
- 一 卷々の名どもの事
- 一 人々の名の事
- 一 紀年の事
- 一 系図の事
- 一 此物語に種々の法則ある事
- 一 をりをりのけしきを書る所の事
- 一 頭書評釈凡例
- 一 本文訳注凡例
- 一 已上

- 一 丁 (翻刻 四)
- 二 丁 (翻刻 五)
- 六 丁 (翻刻 七)
- 十三 丁 (翻刻 一)
- 十五 丁 (翻刻 二)
- 十九 丁 (翻刻 四)
- 二十一 丁 (翻刻 五)
- 二十七 丁 (翻刻 一八)
- 四十 丁 (翻刻 二)
- 四十五 丁 (翻刻 五)
- 四十六 丁 (翻刻 五)
- 四十八 丁 (翻刻 六)
- 同 (翻刻 六)
- 五十 丁 (翻刻 七)
- 五十二 丁 (翻刻 八)
- 五十三 丁 (翻刻 九)
- 六十六 丁 (翻刻 一五)
- 六十八 丁 (翻刻 一六)
- 七十六 丁 (翻刻 二〇)

可^レ為^ス源氏^トと見えたり。されば旧説はいかがあるべき。嵯峨天皇の御時は、殊に漢籍^{カクワシ}をもてはやし給へれば、大かたは長胤がいへりしごとく、同源の義^{ココロ}にて賜へるなるべし。さる故に源氏をば殊に重みし給ひて、皇子の氏^{ウヂ}にのみ賜へる例とはなりにけん。さて物語といふ事は、玉小櫛に云^ク、中むかしのほど物語といひて一くさのふみあり。物語とは今の世にはなしといふことにて、すなはち昔ばなし也。日本紀に談といふ字^{モト}をぞ、ものがたりと訓^トたる。そを書^クに名づけて作れることは、絵合巻に、物語のいできはじめのおやなる、竹取翁にうつぼのとしかげを合せて、とあれば、此竹取やはじめなりけん。その物語、たがいつの世につくれりとはしられねども、いたくふるき物とも見えず。延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる云々。さてもろもろの物語のさま、おのおのすこしづつかはりてさまざまなれども、いづれも昔の世に有し事をかたるよしにて、あるはいささかかたち有し事を、よりどころにしてつくりかへてもかき、あるは其名をかくしもしかへもしてかき、あるはみながら作りもし、又まれには有し事をそのままに書るも有て、やうやうなる中に、まづ多くは作りたるもの也云々。かくていづれの物語も、男女のなからひの事をむねとおほく出たるは、よよの歌の集共にも、恋の歌の多きと同じことわりにて、人の情^{ココロ}のふかくかかること、恋にまさるはなければなり、といはれたるがごとし。なほ本書を見て知るべし。

紫式部の事并日本紀の御局の事

この物語つくれる人の紫式部なることは、みづからかける日記にも見えたれば、動く事なし。この作れるにつきて、昔よりさまざまの説ともあれど、いづれも後よりおしかりていへる妄説^{マダコト}なること、紫家七論、源注拾遺、玉小櫛などに委しくいはれたれば、ここには省^クく。さるは

●「惣論上」「惣論下」の翻刻に当たっては、濁点はそのままとし、句点は適宜読点に変えた。

校正訳注源氏物語評釈首巻

惣論上

萩原広道著

源氏物語といふ題号の事

源氏物語といふ名の事は、本居翁の玉小櫛に云、大かたもろもろの物語の名の例、おほくは其中に主としていふ人の名をもてつけたり。此物語もそのうにて、光源氏君の事をむねとしてかける故に、源氏の物がたりとはいふなり云々。さて物語の名、光源氏の物語といふべし。ただ源氏物語とはいふべきにあらず、といふ人あれど、さしもあらず。はやく作りぬしの日記にも、ただ源氏の物がたりといへるをや、といはれたり。此説のごとし。さて源氏の事は、岡部翁の源氏新釈に云、国史また新撰姓氏録などを案ずるに、嵯峨天皇弘仁五年に、皇子信公以下男女八人に、始て源朝臣の姓氏を賜はりて、左京に貫ね給ひしより、皇子に氏賜はるは専ら源氏なり。諸抄に、此時三十余人に始て源氏を賜る、といへるは委しからず。最初八人にて、次々に三十余人には至れるなり、といはれたるがごとし。源字の事は、旧説に、濫觴^{ランサウ}小水為^ル九河之源^トの義に祝して用るなり、とあり。今案に、伊藤長胤が秉燭譚に云、北魏の時、源賀に始て源姓を賜ふ。源賀は本魏の皇族にて、源を同じうするに因て、始て源姓を賜ふ事源賀が伝にあり。本朝にても源氏は皆皇族より出つ、同一義なり、といへり。かの国の史を考るに、げにも此事ありて、源賀禿髮儻^{クハツ}檀^{タン}之子也云々。太武謂曰、卿与朕同源^ス、因^テ事分^レ姓^ト、今

妄説^{マダコト}とだに思へば、皆無用なる論なれば也。さて作りぬしの系図は、旧注どもに見えたる中に、安藤為章の紫家七論なるは、殊に委しく考へたるもの也。父は正四位下越前守藤原為時朝臣とて、関院左大臣冬嗣の子、贈太政大臣良門公より四世の孫なり。母は常陸介藤原為信朝臣の女、夫は左衛門権佐藤原宣孝朝臣とて、同じ良門公の五世の孫にて、勸修寺家の祖なり。さて宣孝朝臣の北方となりて、大式三位賢子と、弁局^{ヘンクウ}とを産て後、長保三年四月に宣孝卒られしかば、四五年ばかりやもめずみして、寛弘二三年の比より、上東門院へ宮づかへに出られたるさまざまの事、また此物語作られたるは、そのやもめずみのほどなるべき事、また万寿二年の比までは存生にて、上東門院に仕へられたりしさまなる事など、委しくかの七論にいへれば、ひらき見て知るべし。此人実の名は伝はらず。紫式部といふはいはゆる呼名なること、玉小櫛にいはれたるがごとし。さて紫式部といふ名につきて、説ども多かる中に、河海抄に、紫のうへの事をすぐれてかき出たる故に、藤式部の名をあらためて、紫式部と号せられけりとあるを、七論又源注拾遺などにはとられ、玉小櫛には、袋草子に、一条院の御乳母の子なり。しかうして上東門院に奉らしむとて、わがゆかりのもの也。あはれとおぼしめせ、と申さしめ給ふ故に此名あり。武蔵野の義也、とあるをとられたり。この二つをおもふに河海のかたまされるやうなり。紫式部日記に、左衛門督^{ミヅノ}、あなかしこ、このわたりに若紫やさふらふ、とうかがひ給ふ。源氏になるべき人見え給はぬに、かのうへはまいていかでものし給はん、と聞あたり、とあるをいづれも引出て、契沖為章は、これによりて、かの河海の説の証とせられたるを、小櫛には、ゆかりの説による時は、紫といふ名かの紫上にはあづからぬ事なるを、それとよそへてのたまへるぞ興なる。すべてたはふれ云は、あらぬことをめづらかによそへていふをこそ、興と

はずなれ云々、といはれたり。今案に、まづ河海に藤式部をあらためて、紫式部と号せられけりとはあるは、上東門院の号し給へる意か、また世人の号しける意か、わきがたけれど、まづは上東門院の号し給へりといふやうに聞ゆる也。もしさる意ならば、それは誤なるべし。大かたこの呼名は、式部また侍従少納言などいふ類こそ、みづからもつき、事がらによりては主よりも賜ふべき事ならんを、その上に冠らせたる、紫、和泉などいふ類は、皆他より呼分ちたる名と聞こえたり。此人もそのはじめは、江侍従清少納言などのごとく、其氏によりて、藤式部といへりしとあれば、これすなはちその呼名なりけるを、此物語作り出で後に、他より称て紫とはかうふらせつらんとぞおぼゆる。もしくはこの公任卿の、たはふれ給へるなどやその始なるらん。よしさらずとも、他のつけて呼たるが、何となく弘まれるなるべし。其故は、もし紫上の事をすぐれて書たるゆゑによりて、紫といふ名を賜はらばそは我身やがて紫上に擬へられたるがごときものなれば、かの用意ふかき人ならば、必辞ひ奉るべき事也。(一) また一条院の御乳母子の故をもてしか名づけ給ふならば、これは殊にかしこきわざなれば、かならず甚く辞ひ奉るべき事決し。そのうへ、帝はゆかりの者なりとの給ふとも、上東門院の、それをやがて、御みずからめし使ひ給ふ女房の名につけ給はんも、いかかしき事なるに、まして世人のしか呼んは、いともかしこきわざなれば、必さはいふまじき事ども也。さればただ藤式部とのみいへりしを、藤と紫とゆかりもあれば、かたかたに思ひよせて、他より紫とはつけたるなるべし。さてはじめはしかあだ名につけたりしも、何となく呼名のやうになりては、おのづから藤式部のかたはずたれて、専ら紫とのみいふやうにはなりけんかし。小櫛に、たはふれ云はあらぬ事をめづらかによそへていふをこそ興とはすなれ、といはれたるは、もとよりさることなれど、最初より此

けれ、として引れたるは、さる本も有しにや、もしくは本によみ給へれとあるを見て、帝より式部を、給とはのたまふまじぐ、又給へとおのがうへにつけていふ意としては、語格の自他たがへれば、誤なりと見て、改められたるか、そはしらねども、よみた。べけれといひては、さえあるべしといふに、かけ合ぬがごとし。たるは既に読たる意なれば、べしと末をかねていへるにかなはず。又べしを推量りたる意として、俗言にさえガアルデアラウといふ意としては、次の詞に、おしはかりにいみじうなんざえある、さえの下にかもしある本は衍りたるなりと殿上人などにいひちらして、とあるにかなはず。さるはまことにさえあるべしとのたまひたるを、いみじうさえあるといはんは、いささか言のかはれるのみにて、事のすぢは同じければ、さばかりたがへる事にあらざれば也。案ふに、給ふのふもじは、そへてかかぬが昔の例と見えて、此物語の古き写本どもに、いづれも添たるはすくなし。さればなほたまふべけれ、とよむべくおぼゆ。さて帝より式部を、給ふとのたまはんことは、後世にてはありげにもなき事のやうなれど、其世さまの詞には、さる例ども、此物語の中にもこれかれ見えたれば、これはさして疑ふべきにもあらず。かくて言の意は、此人は日本紀を讀べし、さらばまことに学問あるべし、との給へるにて、さえは例の秀才の事にて、今世に学問といふ事、あるべしは、今より後出来べしといふ意にて、べけれもべしも、共に末をうけていふ辞として聞ゆべし。それを左衛門内侍の、いみじう学問ありとのたまへるやうにいひひがめて、殿上人などにいひちらして、かかるあだ名つけたるを、心うきことに思ひしなるべし。かく見ざれば、事のみさま打あひがたし。されども日本紀とあるを、書紀のみにはあらず、すべて国史を日本紀といひならへるやうにいはれしは、事がら実にかあるべくぞおぼゆる。この論もうきたる事なれば、まことにはいかがあらん。例の人さだめてよ。

人に紫といふ称ありしならば、此物語に紫上の事を、とりわきていみじくは書べくもあらず。もし書たらば、我身やがてそれにならずふるさまに聞ゆべければ也。されば猶紫上の事を、すぐれていみじくかかれたる故に、他よりおして紫式部とはつきたりこそおぼゆるなれ。紫上の事は、げにもすぐれていみじくかかれたるに、この物語をも、はやく紫の物語、と更科日記には見えたれば、契沖の説のごとく、呼名のおこりもそれに因ることは大かたたがふまじくぞおぼゆる。また袋草子の一説に、若紫の巻を作る、甚深なる故に此名を得たり、とあるは、先達のとられざりしごとく、ひがことなるべし。そもそもかうやうの事は、今となりてはよくもしられぬ事なるに、たしかに引出てことわるべき、例証もなきことなれば、実にはいかなるさまなりけん。ただその事情をおして、かりそめにいひさだむるなれば、いづれかまさしくあたるべき。見ん人扱ひてとりねかし。さてついでにはまほしきは、かの紫式部日記に、さるもの内侍といふ人侍り云々。うちのうへ、源氏のもがたり、人によませ給ひつつきこしめしけるに、この人は日本紀をこそよみ給べけれ。まことにさえあるべし、とのたまはせけるを、ふとおしはかりに、いみじうなんざえあると、殿上人などにいひちらして、日本紀の御つばねとぞつきたりける、いとをかしくぞ侍る云々、といふことあり。これにつきて、藤井氏の日本紀御局考といふもの一卷あり。其おもふきは、この日本紀とあるは、日本後紀、続日本後紀をさしてのたまへるよしをいひて、書紀より続後紀までの四ふみは同じ名なれば、昔は国史の事を日本紀といひつらんよしを論らひ、さて源氏君を嵯峨天皇に准へたる事より、次々に巻中の人々を、其世の人に思ひあてたる准拠を挙て、日本紀をよく読たるよしを、のたまへるやうにいはれたり。然れども此所の文、本によりて異動あるを、かの御局考には、日本紀をこそよみたるべ

さてかく日本紀の御局とつけたるにても、其世に人のあだ名つけけんならはしを、おもふべし。猶他にも見えたり。

時世のありさまの事

此物語をよまんには、まづ昔時世のありさまを、よくよく思ひわきまへ置て読べし。然らざれば事のさまいたく違ふ事ありて、後世の心にては、思ひ惑はる事のみ多くして、うまく意得ることかたかるべし。時世とは、此物語作られたる一条院の帝の御代の事なり。紫家七論にいへるごとく、この物がたりは、一条院の御代、長保の末寛弘の始、紫式部寡にて里に住れける間に、かかれたる事は、大かた違ふまじくおぼゆるに、物語のさま、昔の世に有し事のやうには書のがれたるものから、すべての事のありさまは、昔世のありしおもふきにて書れたり、と見えたれば、作者の在世のほどのありさまにて意得べきこと多かり。そのありさまをかつがついはんに、先我大御国の上古は、神武天皇、大和の橿原に大宮を建て、天下をしらしめしける時、神代ながらの御制度のままに、何事をもおきて給へりと思えたるにその制度のありさまは、大かた今世の御制度にちかく、朝廷に仕へ奉るを伴造といひ、諸国にて地を賜へるを国造といひて、おのおの生れながらにして、其家を継其職をも継て、幾世ふれども遷し変らるる事はなかりしを、これらの事の委しきさまは、上古政違考にいへればここは省。推古天皇の御世に、もろこしの冠位儀礼のさまを摸し給ひ、孝徳天皇の御世に、もろこしの郡県の制度を摸し給ひし後は、そのさまいたく変りて、大かたもろこしさまにぞなりにける。これらの委しきさまは、日本紀また令格式の書をよみてしるべし。そのあるやうは、日本を六十余国と制め、国の下に郡を置、郡の下に郷を置、郷の下に村を置て、おのおの其吏をさだめ、朝廷にはもろもろの官位を制められ、万の事を司る所を置れて、各其吏をさだめ給ひ、その官につきて位

の階あり。又その官位につきて、位田職田とて官位の禄あり。かくて朝廷にまぢかく仕奉る人たちは、其官位を賜りて、次第に高き階にも昇りゆく事なれど、官位は其人の一世かぎりにして、家を世々にしては伝へぬ御制度なりき。また国々の司は、京より出て年を限りて、ここかしこ移るひわたりつつ、其国を治めらるることなりき。是いはゆる受領なり。郡領より已下の吏は、大かたその国の造県主などのなれるもありと見えたる。これも年限など有けん。されども元來其所に住たる人なれば、後には世々其職を継たるさまなり。さればいと卑しき吏ながらも、威権はこよなき事どももありし也。大かたかくのごとき御制度にはありしかど、我皇国は神世よりこのかた、氏姓を重みし、家系をいひたてて、貴き賤きを分つ国風なりしかば、その御制度は御制度として、やうやうにうつろひゆきつつ、此一条院天皇の御世のほどなどに至りては、其職に任せらるべき家々も、大かた定りたるがごとくなれりし也。さても官位は、一世ばかりの御制なるからに、其官位につきたる禄も、また一世かぎりなりし也。されば世嗣のかはる時などには、いたく困ずべき事なる故に、私に田など買て、家のたつきとせられたる、是を庄園などといふ。今世にも某庄といふ名の、国々に遺れるは、其人の庄とありし所にて、皆私の領所の跡なり。源氏君の須磨、八宮の宇治なども、その領所めきて聞えたり。かかる光景なりしかば、帝の御子とまうせども、さるべき御後見などのあらざるは、いと貧しくして、人げなきさまなるもおはしし事、常陸宮の姫君、宇治の八宮などの御さまにて思ふべし。さて官位に昇ることも、貴き家に生るる人は、その父祖の庇陰によりて、最初よりさるべき官位にも、つき給ふことなれど、地下といふより下ざまなる人は、さやうの憑もあらざれば、其時々権威ある人の家に、私に心よせ仕へて、其勞をもて、朝廷につかうまつるべき種子として、官位をも

申賜はり、後々までも其家の庇陰によりて、高き階にも昇りゆく事なりき。されば朝廷の御臣とも、権威ある家の臣とも知れぬさまなる人ども多し。此物語のうちにて、帚木の紀伊守、夕顔の惟光などやうの人、皆しか也。これ上古にも今世にも、絶てなき事なれば、その勢ひいたく異なる事どもおほし。心得おくべし。また住所の事も左京右京のうちに、定れる宅地を賜はるやうには見えたれど、此物語などのさまにては、しか敵かなる事とも聞えず。富栄えたる人などは、己が意にまかせても宅地を買とり、或は人に譲り、又貧しくなれば売などもせし事、他し書にも見えたれば、大かたはこれも勢ひにまかせ意にまかせて、何処へも移りゆきし事とおほゆる。さるは公卿より下の人々は、世の代る時などは、さるべき人もあらざれば、いと流落ることなどありて、其勢ひのさまによりては、いかさまにもよろしきにしたがふべければ、おのづからさやうにはなれりしにこそ。まして婦人などは、さまざまに浮れ漂ひて、所縁につきつさらぬ人の妻になる類もありと見ゆること、かの空蟬夕顔などのさまにて思ふべし。さて又いと上古には、氏姓の系を殊に重みせしならはしなりしかば、皇后に立給ふは、大かた皇子の系におはしましけるを、後にはやううつろひて、大臣の御女なども、皇后に立給ふ事もいできて、皇子など産奉り給へば、御外戚がたもその御ゆかりにつきて、上なき位にも昇りなどし給ひ、さらぬ公卿の御女たちも、女御更衣にそなはり給ひて、皇子うみ奉り給へば、同じく御威権のいよくることなりしかば、いづれもいづれも、息女をいつきかして、宮仕に出したてんとせられたる事、當時のならはしなりき。桐壺更衣の御父按察大納言の遺言せられしやう、明石入道のかたくなに思ひつめたりし事などを見て知るべし。これはた今世には、をさをさなき事なれば、いとおもひの外なる事どもおほし。さて又夫婦のなからひなどの事は、

上古よりのなごりにて、ただよくる縁にのみまかせて、これは本妻かれは側室など、きはやかに名をつくる事だに、さばかりきよくはなかりしさま也。されば貴き人の御うへには、本妻とおぼしき人の、二人までおはするもあり。また妻とも妾ともしらぬ類ひなどありて、さまざまなりしなり。これ今世もろこしさまの婚禮のさまとはいたく異なり。そのあるやうをかつがつかいば、此物語また他し書どもにも見えたることく、同じほど、それより少しづつ上下の品はあれども、相偶ひてよろしきほどの家に、女などありと聞ては、たよりにつけつつ文をやりて、其返事のさま、歌のよしあしなどを考へ、手のよしあしなどをも見て、いみじく心にかなへるには、心ざしを尽してひたぶるにいひより、又媒をたのみても心を尽すほどに、つひには事とげてかよひせめ、後にはあらはに女のかたへゆきて住などもするを、其女の父母など打聞ても、よきほどの事なれば、初はしらすがほして打すておき、後にはその婿に対面する類ひもあり。或はまた其男の、心かなはぬをば、聞出すとやがて制するもあり。又いと心にかなへるには、其女に文の返事などをしへてかかせなどもすることなりき。されば文をおくるばかりの事は、大かた何のつつむこともなく、その歌のかへしなどのめでたければ、なかなかみじくいひはやして、感ずることなりしさまは、帝に奏覽する世々の撰集にだに、その歌どもに、作者の名をあらはしかれたるなどにて思ふべし。かかるならはしなりしかば、まれには案外なる事どもいよくめれど、それさしも名分をたてていひさだめたる、妻妾といふにもあらねば、大かたの事はいみじき曲事とおもはぬさまなりし也。貴き人だにかかりしかば、ましていと下ざまには、さこそはさまさまなる事もありけめ。今世もろこしさまの婚礼とおふわざにめなれ、且かの国の後世の理学の論など聞ならひたる心より考ふれば、いととも思ひよ

らぬ事のみにて、彼がいはゆる淫奔の風世に満て、上下おしなべて不義ならぬはなしとこそいはめ。然れども、それは今世にしてさる事おこなひたらばこそあらめ。其世にはこれすなはち其世の夫婦の道なりしかば、誰一人ひがことおもへるはなかりし也。かくいひても、猶今の俗はあやしみて、いひとく人に罪おほすばかりなるは、かの夏虫の水を疑ふたぐひにて、ならはぬ事を見聞て驚き思ふ故ぞかし。されども又男女のなからひの正しかりし事は、今のさまとはこよなく異にて、男女つねにたいめんとすといふ事はなく、止事を得ずしてあふ事のあらんにも、疎き人は簀子にだにのぼらせず、やや親しきも簾を隔たるうへに几帳をたてそへ、或は障子を隔たる物ごしなどにてあひても、猶声きかすばかりもはづかしき事とおもへり。兄弟なども異腹なるは、なほこのぢやうにて、あらはに面を見するを恥たり。もし其世の人に今世のさまを見せたらんには、何とかいはん。いとみだりがはしく恥をしらぬ風俗とこそいはめ。されば昔は昔、今は今、皇国は皇国、もろこしはもろこしとして、其世のありさまを疑ひあやしふべからず。猶いはば、我皇国は氏姓のすぢを重くする国俗なれば、男女の縁も、あまりに貴き賤しき事たがひたるは、ふさはぬ事なれば、いかに妾なればとて、あやしくやうたがひたる者の女などを、貴き人の側に近づくる事などは、昔はをさをさなかりし事也。又事理をみていはば、男をぞまづ女の家に通ひて妻問すべきことにて、見も知らぬ女を、先男の家におくなど、うらうへなること也。さればもろこしにも、親迎などいふわざの見えたるは、かたばかりさることを思へるなるべし。すべて男女のみちは、かたみに相感てあふべきことわりなれば、聞も知らぬ人を、おやしそくの心もて、あながちに引もてきて、おしする事などは、天地のおのづからなることわりならねば、昔の世にはせざりしなるべし。又媒といふものを、其家のさま人の

さまなど、よく見知たる女房などにして、女も物のいひにくからぬ人などつかはして、志のせちなるよしをいひしらす事なりしは、人の心をやぶらぬわざとこそいはめ。なにがしと名たたる人の媒して、其親々と敵かにいひ契れる中には、ただ一言のたがひもて、男も女も永き世の物思ひとなる事もあるを、おもひくらべて考ふべし。大かたそのかみは、時の帝と申せども、したがはぬ女をあながちにめさるるさまにはあらず。桐壺の帝の、藤壺の中宮をめされし所、また朱雀院の帝の、秋好中宮に思ひかけ給へる事などを見て知べし。其中に玉かづらの君の事などは、余りにかしこき事のごとくなれど、それはた情をさきだつるならはしなりしかば、うちうちの事はあらはに咎め給ふことなどもなくて、すぐし給へる事と聞えたり。これらはあまりになよび過たる事にはあれど、人の妻妾と定れる女を、おしたちて奪ひけん、もろこしの王どもがうへにくらべて、皇国のならひのまされるを知べし。大かたこれらの事どもは、今世のさまとはいたく違へる事なるからに、聞つかぬ輩は、これを見聞て、我国は礼儀もしらぬ夷狄の国のごと、思ひいふめれど、それは皆もろこしのふりをのみならひたるにて、国々のおのならばしの異なることをえしらぬ、いみじき心が心といふべし。その中にも上にいへる、天下の御制度などは、我皇国のふりならず皆もろこしのふりを摸されたること、又この男女のなからひのさまは、しかもろこしさまを摸し給へるころなりしかど、猶我国ながらのならばしなる事、又今世の御制度は、大かた孝徳天皇の御世よりあなた、我国さまの御制度なること、又今の夫婦の定めは、もろこしの例にならへるものなることを、思ひ弁ふべし。猶いはまほしき事どもは多かれど、それは又別なる書にいへれば、ここには省きつ。ただ此物語をよむ人の、いつもいつもいふかしむ事どもは、おほよそ上にいへるが如きことなれば、あらあら其あるやうを示し

其世のさまをさとるべし。中昔のほどのありさまを知るには、此物語などは殊によりしき書なれば、彼正しき書どもに見合せて、其世のふりを考ふべし。これなん学問のむねとあるべき事なりける。

此物語称誉の事

旧注どもいづれの抄にも、此物語古来称誉之事、といふ条ありて、むかしより人々の誉られたる事どもを記されたり。然れども皆ただかたそばかりの事にて、まことによくいはれたりとおぼゆるも稀なり。ただ玉小櫛にいはれたる事のみぞ、此物語のさまにいとよくかなへれば、いささかここに引いで、よむ人のしるべとす。小櫛に云、ここの物語書どもの中に、此物語はことにすぐれてめでたき物にて、大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなる物語どもは、何事もさしも深く心をいれて書りとしも見えず。ただ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、おどろおどろしきさまの事多くなどして、いづれもいづれも、物のはれなるすぢなどは、さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物どもは、狭衣などは、何事ももはら此物語のさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものから、こよなくおとれり。其外もみなことなる事なし。ただ此物語ぞ、こよなく、殊に深くよろづに心をいれて書る物にして、すべての文詞のめでたきことはさらにもいはず、よにふる人のたたまひ、春夏秋冬、をりをりの空のけしき、木草のありさまなどまで、すべてかきさまめでたき中にも、男女その人々のけはひ心ばせを、おのおのことに書分て、ほめたるさまなども、皆その人々のけはひ心ばへにしたがひて、一やうならず。よく分れて、うつつの人にあひ見ることくおしはかるるなど、おぼろ氣の筆の、かけても及ぶべきさまにあらず。さて又よろづよりもめでたきこと

おく也。よくよく時世のさまを意得て、うたがふべからず。熊澤氏の源氏外伝にいへらく、惣じて其代にて見ると、後世より見るとは相違の事あり。其世には治世無事と思へども、その世の凶事どもを取あつめ、一所に書つらねたる記を見れば、治世のなきやう也。又戦国の記を見れば、朝夕軍ありていそがしきやうなれども、世間無用の多事やみて、却て隙なるもの也といへり云々。源氏も一生好色の人のやうに見ゆれども、さありては人の交りもなりがたかるべし。古の書を見るには、万事おもひやりあるべし。といへり。まことにさることなればここにかかげつ。おのれ常にいへらく、昔の書どもをよむには、心得べきやうあり。それはまづ国史、また律令格式の書などは、大かたわるき事をば用意して記し、又その人をおもむくる法などをみ、記されたるなれば、これをよめば、何事もいみじく聞えて、さながらに滞りなく、行はれたることのやうにおぼゆるを、此物語さらぬも其世々のうちとけ言の物語などを見れば、おもひの外にたがへる事どもも多し。さる条どもを彼此かよはし考へて、其世々のありさまを推て知るべし。すべて昔の書を読んで学問する事は、むねと其時世のあるやうを考へて、今世にはたらかし用ひて、益ある事どもを、知ん為なれば、なほざりに見んはいたづらなるわざ也。よに漢字する人など、かの国の経書といふ物をのみ、常に見ならひて、彼国は何事も、すべてうべうべしく思ひたる国のごといふめれど、その打と言かきたる書などを見れば、いといとあやくわるき事も多くして、かの経書また法令教訓の書にいへるやうなる事の、さながら行はれたることとは、昔よりさらになき事いとよく知れ、其中には、あまりに道理を責る故に、中々にねぢけたるふり、情なきならはしなども起れりしさま、殊に多く見えしらがふめり。されば何れの書を読んにも、ひたふるに其文ことばに泥むことなく、人情のなりゆく末々を、深く思ひはかりて、

は、まづからぶみなどは、よにすぐれたりといふも、世の人の事にふれて、思ふ心の有さまをかけることは、ただ一わたりのみこそあれ、いとあらく浅きもの也。すべて人の心といふものは、からぶみに書ること、一かたにつきぎりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかやくと、くだくだしくめめしくみだれあひて、さだまりがたく、さまたまのくまおほかる物なるを、此物語には、さるくたくたくまぐままで、のこるかたなく、いとくはしくこまかに書あらはしたる事くもりなき鏡にうつして、むかひたらんがごとくにて、大かた人の情のあるやうをかけるさまは、やまともろこしいにしへ今、ゆくさきにもたぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる。又すべて巻々の中に、めづらしくおどろおどろしく、めさむるやうの事はさをさなくて、はじめよりはりまで、ただよのつねのなだらかなる事の、同じやうなるすぢをのみいひて、いと長きふみなれども、よむにうるさくおぼゆる事なく、うむことはなくて、ただつづきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おのれをしへ子どものために、はやくより此物語をよみときてきかすること、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、説にうむ心もまじるを、これはさしもながき書にて、年月をわたれども、いささかもうむ心いでこず、たびごとにはじめてよみたらむこちして、めづらしくおかしくのおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどはしられて、かへすがへすめでたくなん。といはれたり。まことに此説のごとき書になん有ける。その中にもげにいはれたるやうに、人の心のうちに思ふことのみまぐまを書あらはしたるは、いみじくいふなる漢文にも、こよなくまさりておぼえたり。今そのゆゑを案ふに、漢文にはすべててにをはいふ物なきからに、ものの心ばへなどを、いといと委しくいひきはめんことは、おろそかなるべきことわり也。されども其もじごとに義

を含みたる故に、上手の書る物などは、字の外に余光あるごとくにして、めでたく聞ゆることなれど、すべてはいはゆる自他天人過去未来などの事を、きはやかにいひ分つことあたはずして、いとおほらかなる物なれば、此事は別にいひたる物あれば、こゝにはただ大かたをあげつらふのみ也たとひ稗史小説などいふ類にても、心におもふ事などは猶あらくして、うはべのありさまを、他より評じたるごとき体の物となれり。これからぶみのみじかき所なり。我國の文もあだし書なるは、皆ただ事の意の聞ゆるをのみせんとして、心をこめたるものならねば、此物語のごと委しくめでたきはさらになし。さればただ此物語のみぞ、漢文にもまされる皇国ぶみの、ほんどすべき物にて、げにもやまともろこしいにしへ今、ゆくさきにも比類なき書になん有ける。

此物語の歌の事

玉小櫛に云、すべて物語の歌の事、伊勢物語などは、おほくは古歌なれば、よきが多きを、作りぬしのあらたによみたりとおぼしきはよからず。中にはえもいはずわるきもあり。その外の古き作り物語ども、大かた歌はみなわろし。然るに此源氏の物語なるは、みな作りぬしのよめるなるに、わるきはをさをさ見えず。みなよろしき中に、すぐれたるもまじれり。歌は源氏なるよりは、狭衣ぞよろしきといふ人もあれど、然らず。さごろものも、ほかの古物語どもの歌にくらぶれば、げにこよなくよろしけれども、源氏のよりまされることはあらず。といはれたる、これもあたれる評なるを、近世の歌よみどもは、うけあへぬも多くありて、とやかくやもどきいひ、これらのことによりて、本居翁の歌をさへつたなきやうにいへるもあるは、いみじきひがこと也。それは此物語の中なる歌どものさま、一ツの体ありて、八代集などの体とはいささかかはりたる所もあるに、ちかきころは、万葉集の詞をまじへてよむを、いみじ

きけば、ただ一ふしあやしき事を考へ出て、物のあはれしらぬ人の耳に、けざけざとつらぬきて、げにとおぼゆべきさまのことつくるを、上手とはする事のやうなれど、それは皆このごろのさとび心の定めにこそあれ。実に本として学ぶ所の古の歌に似たらんには、今俗の耳には疎かるべきことわりなれば、しかかどなきさまにいはれなんは、中にいにしへの体に近きなるべし。かうやうの事は、猶いといはまほしき事多かれど、此物語にあづかる事にもあらざれば、ここには省きつ。安藤氏が紫家七論にもいへらく、物語のうち、和歌ならびに詞ども、万葉古今伊勢ものがあり竹とりなどの古体をはなれて、しかもおほどかにて、やすらかにやさしく、おほかた吾国の風流をつくしたれば、見る人をして倦事を知ざらしむ、まことにやまとぶみの上なきものなり。といへり。いにしへの歌物語の書どもを、よく見明らかめたる人の論は、誰も皆かくなん有ける。さて又玉小櫛云、此物語、源氏君をはじめて、よき人としたる人の事は、何事もめでたきさまにはめたるに、そのよみ給へる歌のみは、ほめたる所一つもなくして、其人の他事のよきにあはせては、歌はあしきやうにいへる事のみ、ところどころに見えたる、そは此物語の中の人々の歌は、みな紫式部みづからよめるなれば、ほむればわればめになる故也云々。ここに其例ども多く挙げられたれど、今は略く。みなつくりぬしの、卑下の心しらひにていへる詞どもなるを、むかしよりそこに心つける人なくて、ただまことにその歌のよからぬやうにのみ、注せられたるはいかにぞや。とあり。これ又心得おくべき事也。小櫛に又云、歌よむべき心ばへをしらむとならば、此物語をつねによく見べし。此物がたりに書たる事ども、人々のしわざ心ばへは、こゝに歌よむべきころばへ也。しかいふ故はいかにといふに、まづ人の情は、古今たかきみじかき、かはる事なき物とはいへども、其中に時代のならひ身のほどなど、おのれおのれが世中につきて、いささ

きわざのやうに心得、それに新古今集のしらべなどをとりそへて、風韻ありなどいふ類の事行はれたる、其すゑずゑには、今俗のただに思ひいふことにちかき、いやしげなる事をさへいひて、さとび心へつらひたる歌などもありて、おのおのたてたる私説をおし立んとて、さる説をもいふにぞあるべき。それはみないにしへの心詞を深くもたどらず、此物語なども、ただうはべばかりのぞき見たるのみにて、いひしらぬ味はある事さえしらぬからに、さとび心に思ひなすらへて、妄に評するにてそあれ。まことに此物語の歌は、大かた一ツの体あるものから、又しかひたむきにはあらずして、古ぶりなるあり、後のさまなるあり、きすくなるあり、たくみなるありて、おのおの其人の其事がらに相かなへたるなれば、もろもろの体一ツとしてそなはざることなし。そが中にも、巧なると余韻あるとは、いひしらぬまでたくみにほひあるもあり。又その一ツの体といふも、そのさまによりて、前後の文の詞にほはせて、ひびきあるさまに詠れたる故に、よのつねの歌集どもに、一首づつはなちて挙たるとは、おのづから差ありて、一ツの体あるやうには見ゆるなれど、すべては別にあやしき体あるにはあらず。しかるをただ一わたりに思ひとりて、それ称たる先達をさへ、つたなきやうにいひちらすめるは、いとあぢきなくかたはらいたき事なり。此物語のうちに、歌の事を論ぜられたるところのあるをも見て、歌といふものすべてのさまをもしるべく、又作りぬしの歌にらうらうしかりしほどをも思ひ弁ふべし。さて又本居翁の歌は、此物語のみならず、中昔の比の歌のさまを、いとよく学びとられたるものにて、其さまおだしく、おどろおどろしきふりなどは、たえてなき故に、ふと見ては、かどかどしからぬやうにも見ゆめれど、よくよく味はひ考ふれば、げによくうつしとられたる所ありて、古人のふりにかなへるもの也。すべて近世に、よき歌とていふを

かかはれるところもなきにあらず。かくて歌も情の物に感ずるより、よみ出るわざなれば、いにしへ今高きみじかき、かはりはあるまじかるべきことわりながらも、上つ代こそあれ、中むかしよりこなたの歌はしも、かならず今思ふ心をのみ、有のままによみいづるにもあらず。いにしへの歌をまねびて、其おもむきによむわざなれば、いにしへの世の有さま、人のこころばへしわざを、よくしらはかなはぬわざ也。又いにしへをまねぶといふ中にも、万葉集よりあなたのは、世あがり事とほくして、そのさまいたくふりにたれば、さしおきて、おほかた古今集よりこなたをまねぶことなるに、そのよの歌どもは、みなむげにいやしきしづ山がつのよめるにはあらず。されば古の歌をまねぶにつきては、中の品より上さまの人の心しわざ、その品の世中をもしらではかなはぬわざなるを、今の世にして、それこまかにしらなためには、この物語を見るにまさることなし。いにしへのものも、ただ歌を見たるのみにては、その歌のいできつる、本の心のくはしきやうをしらざる故に、まねぶに猶うときかたあるを、此物語を明暮によみなれぬれば、源氏君をはじめて、よきことのかぎりをとりあつめて、みやびたる人々にまじらひて、まのあたりその気はひかたちを見、その物語をきくがごとくにて、そのしわざになれ、その心のうちまでこまかに見しられ、又そのかみの雲の上の有さま、をりをりのおほやけ事、やむことなき家々うちうちの事どもまで、雅たる事のかぎりを、今のうつつのめのまへに見るがごとくなれば、いにしへ人の歌の出来たる、本の有さま心の、よくしられて、かやうの歌は、しかしかの時に出て、そのをりのよみ人のこころは、しかしかなる物ぞとやうに、くはしくしらるるわざぞかし。さるゆゑに、此物語に書たる事ども、人々のしわざ心ばへは、ことごとく歌のよむべき心ばへぞとはいふ也云々。さて此物語をつねによみて、心を物語の中の人々の世中

になして歌よむときは、おのづから古のみやびやかなる情のうつりて、俗の人の情とははるかにまさりて、同じき月夜を見たる趣も、こよなくあはれ深かるべし。さるを近き世の人は、古の歌をまねぶとはすれど、古人の世中をしらず、その情にうとくして、ただおのが今の心にまかせてよむ故に、古にたがひて鄙しげなることのみおほくいでくるぞかし云々といはれたり。これ実にいはれたる説にて、歌よむ人の心得になる事おほければ、事の因に引出たる也。猶本書には、こまやかに其ことわりをいはれたれば、ひらき見て知べし。然るをこの段をも又さまざまのひがことをいひて、なじりたる物あれど、くだくだしければここには省きつ。歌の学びざまを論へる書の中に引出て、悉く弁へいふをみるべし。

作者の用意の事

紫家七論に云、凡才徳ともに備ふる事は、丈夫すらかたき事になんありける。まして女にては、大和もろこしいとも稀なるべし。ここにいにしへより源氏物語を論ずる人、ただ紫式部が英才をのみ称して、其実徳をいはざれば、物語の本意もあらはれがたく、式部がためにあかずき事なり。為章つらつら物語とむらさき日記とをよみて、其氣象をはかり、其事実を考るに、やまとには似る人もなく、才徳兼備の賢婦なり。先物語のうへにて、ひとつふたつをいはば、紫上のらうらしくおほどかなる物から、おもしろかにして用意ふかく、明石の上の心たかき物から、へりくだり、花ちる里のものねたみせず、藤壺のきさきのあやまちをくいて、はやく入道し給へる、朝顔の齋院のふかく名ををしみ給へる、玉かづらのうへの言よく人々のけさうをのがれ、総角の君の父宮の遺戒を守りたるなど、様々の婦徳を記し、殊に品定に、あだなるをしりぞけて実なるをすすめ、しばしば警戒をしめしたるは、しかしながら式部が心お

きてなりといへども、みなむかし物語に書なして、みづからかしたてをあらはさざれば、よむ人もただ他の噂のやうにのみおもへり。たとへば本人の歌舞は、偃師がユミなることをしらざるがごとし云々。といへり。此末紫日記を引いて註して、其才徳のいみじかりしよしを委くいへり。本書を見るべし。また玉小櫛に云、紫式部が心ばへは、此物語とかの日記とをもて考ふるに、女の学問だてして、さかしだぢえがかるをば、いみじくにくみて、みづからも人にしか思はれじと、深く用意したるさま所々に見えたり。帚木巻に、すべて男も女もわるきものは云々といふより、いはまほしからん事をも、一つ二つのふしはすぐすべくなんあべかりける、といふまでの詞など、みづからの学問だてをにくみてせぬ心をしめしたる物なり。同巻に、などかは女といはむからに云々、めにもみみにもとまること、じねんに多かるべしといへるは、女とてもさばかりの事は、もとよりたれも有べきことなればそれにほこるべきわざにあらずといひて、みづからほこる心なきことをしらせたる也。又同巻に、はかせのむすめの事を、式部丞が語りたるを、君たちむくつけきことと、つまはじきをしてあはめ給へるよしかきたる、此女のやうをかむかふるに、さばかりあしくいふべき事は見えざるを、紫式部みづから学問だてをふくむ心を見せんために、ことさあらにいみじくあしき事のやうに、いひなしたるもの也。又をとめの巻に、大学寮の衆の、ふるまひけはひ物いひなどを、いともあやしげに書るも、一興ながら、わざととりたてて学問する者の、優ならぬよしを、ことさらにいみじくいひなせる也。さるはよの人のならひ、すべて何わざも、おのが好みたふとむすぢの事をば、殊にめでたくよきさまにいひなさんとするわざなるに、みづからことに学問を好みながら、かへりてかくよからぬさまにいへる事どもあるは、人にことなるふかき心しらひにぞ有ける。といはれたり。げに此説どもにいはれたるごとく、此物語の中なる人々

の心ばへ、又其事につきたるよきあしきげぢめなどは、皆ことごとく作りぬしの用意なれば、今さらにここには評せず。その条ごとに心をふかめてあぢはひ見なば、まさしく作者に其用意のやうを聞くがごときものにて、いみじき事ども多きぞかし。

物語の心ばへ井物のあはれを知るといふ事

玉小櫛に云、大かた物がたりは、世中にありとある、よき事あしき事、めづらしき事、おかしき事、おもしろき事、あはれなる事のさまざまを書あらはして、そのさまを絵にもかきまじへなどして、つれづれなるほどのもてあそびにし、又は心のむすほれて、ものおもはしきをりなどのなぐさめにもし、世中のあるやうをも心得て、ものあはれをもしるもの也。といはれたり。物語といふ書を見るやうは、げにただかかるものになんありける。さてこの源氏物語は、いかなる心につくれる、といふことの本意は、蛭巻に源氏君と玉かづらの君との、物語の事の間答の中に、何となく書あらはされたるを、玉小櫛に引出て、其意を注せられたり。これまことによき考にて、作りぬしの意をさながらに知らんことは、げにこのうへの事なんかりける。その委しきさまは、かの書を見てしるべく、おのがかうがへは、蛭巻に小櫛の説をまじへて注せれば、今は省きつ。さて又物語の中に、よきあしきなどいへるは、よのつねの儒仏の書にいふ善悪是非とは同じからず。ただ人の情によしあしと思ふ事にて、物のあはれを知るをよしとし、しらぬをあししたる事も、小櫛にくはしくははれたれば、必見るべし。この事のすぢを知らざれば、此物語見ても、其深き心ばへをしるによしなし。実にこの物のあはれを知るといふ事物語ぶみのむねとある事は、この本居先生ぞはじめて見いでて、委しく説述られたるにて、いともの心ことにめでたき考になん

催馬楽の歌の拍子の声にハレといふことあれど、今とは別なり。又西国にては、物に驚歎してハテサテ云々とやうにいふ俗語もあれど、猶あはれの言の本に引いづべくはおぼえずなん。

て、委しく説述られたるにて、いともの心ことにめでたき考になん

有ける。されば小櫛の二の巻は、大かた物のあはれの事をのみ解のべられたり。今其説を引出ていはんには、いといと事長くなるをもて、其要とある所を摘て、いささかここにかかげつ。委しくは本書を見て知べし。さてその説の中に、あはれといふ言の本をとくとて、あはれは見る物きく物ふるる事に、心の感じて出る歎息の声にて、今の俗言にも、ああと いひ、はれといふ是也。たとへば月花を見て感じて、ああ見事な花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、此ああととはれとの重なりたるものにて、漢文に嗚呼などあるもじを、ああとよむも是なり。といはれたるはいかにぞやおぼゆ。その故は、物に感じてああとといへるは、古今たがふことなきを、はれといへることは、をさをさ物にも見えざるに、今の俗言にも聞たることなし。もしくは伊勢わたりの方言などにや、いと心得がたし。さればただあはれといふは歎息の声とのみ見るべき也。此外の説はずべていとめでたし。小櫛に云、人は何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきころをしりて感ずるを、ものあはれをしるとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うごかず感ずることなきを、物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也。もののわかまへ心ある人は、感ずべき事はおのづから感ぜではえあらぬわざなるに、さもあらぬは、何とも思ひわくかたなくて、かならず感ずべきころをしらねばぞかし云々。此物語は、殊に人の感ずべき事のかぎりを、さまざまかきあらはして、あはれを見せたるもの也。まづおほやけわたくしおもしろくめでたくいかめしき事のかぎりをかき、又春夏秋冬をりをりの花鳥月雪のたぐひを、おかしきさまに書あらはせるなど、これみな人の心をうごかし、あはれと思はする物にて、心に思ふことある時は、殊に雪のけしき木草の色も、あはれをもよほすくさはひとなるわざ也云々。広道云此次に此物語の中なる語ども多く引れたれど今ははぶくおのが考はその巻々に注すべし。そもそも紫式部が本意、とにかくに

物のあはれをしるをむねとはして、しらざるがいふかひなきことはさらにもいはず、又そをしりたるふるまひの過たるも、あぢきなくよからぬ事にて、其事のすぢによりては、かならずあだなるかたにながれやすきわざなれば、心には深く思ひしりて、そのよきなどを思ひめぐらして、頭はしふるまふべきすぢもあること、上の件に引出たる、巻々の事どもを考へわたしてしるべし。これぞ此物語の大むねなりける。さてそは作りぬしの、みづからすぐれて深く物のあはれをしれる心に、世中にありとある事のありさま、よき人あしき人の心しわざを、見るにつけきくにつけふるるにつけて、そのころをよく見しりて、感ずることの多かるが、心のうちにむすぼほれて、しのびこめてはやみがたきふしぶしを、その作りたる人のうへによせて、くはしくこまかに書頭はして、おのがよしともあしともいはまほしき事どもをも、其人に思はせいはせて、いふせき心をもらしたる物にして、よの中の物のあはれのかぎりは、此物語にのこることなし。さてこれをよむ人の心に、げにさもあらんと深く感ぜしめんために、何事もことさらに深くいみじく書なしたり。かかれば此物語をよむは、紫式部にあひて、まのあたりかの人の思へる心ばへを語るを、くはしく聞にひとしく、又物語の中に見えたるよきあしき人のしわざ心のおもむきを、よく考へみれば、しかしかの物を見聞たる時は、かやうに思はるるもの、しかしかの事にあたりたる時の心は、かやうなるもの、よき人のしわざ心は、かやうなるもの、わるき人はかやうなるものとやうに、すべて世中の有さま、なべて人の心のおくのくまぐままで、いとよくしられて、物の心をわきまへしりて、からぶみにはゆる、人情世態によく通せんこと、此物語をよむにしくものあらじとぞおぼゆる。已上小櫛広道云、この論まことにさることにて、作りぬしのしたの心を見とほしたらんがごとく、これにつきていはまほしき事のあるは、

くすぐれたるも、恋の歌にぞ多かりける。又今の世の賤山がつうたふ歌にいたるまで、恋のすぢなるが多かるも、おのづからの事にして、人の情のまこと也。さて恋につけては、そのさまにしたがひて、うきこともかなしき事も、うらめしき事も、はらたたしきことも、おかしき事も、うれしきこともあるわざにて、さまざまに人の心の感ずるすぢは、おほかた恋の中にとりぐしたり。かくて此物語は、よの中の物のあはれのかぎりを書あつめて、よむ人を深く感ぜしめんと作れる物なるに、此恋のすぢならでは、人の情のさまざまとこまかなる有さま、物のあはれのすぐれて深きところの味は、あらはしがたき故に、殊に此すぢをむねと多く物して、恋する人のさまざまにつけて、なすわざ思ふ心の、とりどりにあはれる趣を、いともしともこまやかにかきあらはして、ものあはれをつくして見せたり。後の事なれど、俊成三位の、恋せずは人ほ心もなからまし、物のあはれもこれよりぞしる、とある歌ぞ、物語の本意によくあたれりける云々。広道云ここに此物語の中なるあはれの深くしの意によくあたれりける云々。ひがたき事ども引出られたれど、例のはぐく。上件の文どもに、あやしの心やとわれながらおぼさる。葵巻の詞思ひかへし給へどえしもかなはず。夕霧巻の詞などあるをもて、此道の物のあはれの、深くたへがたきほどをしるべし。されば此すぢにつけては、さるまじきあやまちをも引いで、ことわりにそむけるふるまひも、おのづからうちまじるわざにて、源氏君のうへにて、空蟬君の事、朧月夜君の事、藤壺中宮の事などのごとし。恋の中にもさやうのわりなくあながちなるすぢには、今一きはものあはれのふかき事ある故に、ことさらに道ならぬ恋をも書出で、其あひだのふかきあはれを見せたるもの也云々。といはれたり。此次にその事ども引れたれど略く本書を見るべし。此論もいとみじく聞えたり。そもそも恋などいふ事はしも、今俗の心にては、皆いはゆる淫奔放蕩不義非礼の事をさしてのみいふことと思ふらめど、それは皆儒仏の教に耳なれて、しか思

すべて古今、学問といふことする人多くはただ書籍に書たる事のみ読ならひて、今の現の眼前にあることをばさしもたどらず、ひたすら理といふ事をさきだてて、何事も何事もその理におしあてかなへんとすることよ。そもそも学問といふ事は、古の道を学ぶも、もはら古のありさまをしりて、それにくらべて、おのおの生るほどの世中のありさまをもさとり、事の成るべきやうをも思ひめぐらさんためなるべきを、かの理といふものをおしたてたるのみにては、今日の日のありさまに、さながらかなひたる事は少くして、しか学びたるごとく、つゆもたがはずあひたる事はなきもの也。しかるを強て其理にかなへんとては、さまざま賢ぶりたる行ひなどして、心にもあらぬわざどもを、他にかかはらずなしでて、頑固なるふるまひするを、みづからこそいみじとも思へ、大かたの世人よりみれば、いともしともあやしうことさらびたる事なるをもて、はてはては学問する人は、家をも身をも失ふものやうにさへいひしらふめるは、いとあぢきなく心うきわざになんある。さるはいはゆる、人情世態に通ずるかたの学問といふことの、殊にあらざる故ぞかし。されば物語ぶみの類を見て、人の情のくまぐまをなごりなく知明らめて、世の中のあるやうをもさとり、さて千万の書籍どもを讀ば、一書よみて一卷のかひあらんこと、類ひなかるべし。げにそのかたのためなどには、又此物語に過たるものはあらざりけり。昔宮木孝庸といひし人、其君なる玄旨法印に、世間の便になるべき書は、何をか第一と心得侍らんと問しかば、源氏物語と答へられけるとぞ。もしくはかかるかたの事どもをや思ひ給へりけん。これら猶いといはまほしき事どもあれど、それもまた別巻にいふべし。さて又玉小櫛に云、人の情の感ずる事恋にまさるはなし。されば物のあはれのふかくしのびがたきすぢは、殊にこひに多くして、神世より世々の歌にも、其すぢをよめるぞ殊におほくして、心ふか

ひならへるものにこそあれ。実に男女のなからひは、天地の神のおのづからになし出給へる道にして、さらに人の力もて禁むべきものにはあらず。生としける物のかぎり、この道しらぬもあらざるは、これによりて次々に子孫をうまはりもてゆく、世中の本と有ことなれば也。然れどもさばかりいひて、いさめずしもあらば、これによりて争ひもおこり、世のみだれともなるべきなれば、ほどほどに其道をおきて、おほやけより其偶ふべきやうを定め置給ふ。これやがて其世の大道にして、諸人のふみしたがひゆく所の規則なり。されば梅枝巻に、源氏君の夕霧君を教諭し給ふ所などにも、恋のかたにてみだれ給ふ事を、いたく禁しめ給へり。これ人世の道なればなり。されどもその方の事は、法令の書をはじめて、万の教誡の書に載たれば事つきたり。物語ぶみは、世中のよきもあしきもとりあつめて、真情のままにかたりもてゆくものなれば、さる教誡は教誡として、おのづから情のひくかたのさがたきよしを、あらはすを主として、さる教誡にはかかはらぬなれば、さる心して見るべき也。然るを昔よりの注どもに、恋のすぢの事をいたく恥て、或は勧善懲悪といひ、或は好色の禁誡也など、さまざまの事どもをいはれたるは、皆儒仏の書の例をもて物語を見られたるひがことなるよしも、又玉小櫛に委く弁へられたれば、彼書を見て知べし。其論の末の所に云、ものあはれを見せんと作れる物語を、教誡にとりなすは、たとへば花を見んとて植おふしたる桜の木を、伐くたきて新にしたらんがごとし。薪は一日もなくてはいえあらず、せちなる物なれば、それわろきにはあらねど、薪にはよき木どもの、ほかにあまたあるに、あたら桜をきりとらんは、中々に心なきしわざとぞいふべき。なほいはば、儒仏の教とはおもむきかはりてこそあれ。物のあはれをしるといふことを、おしひるめなば、身ををさめ、家をも国をも治むべき道にもわたりぬべき也。人のおやの

子をおもふ心しわざを、あはれと思ひしらば、不孝の子はよにあるまじく、民のいたつき奴のつとめを、あはれと思ひしらんば、よに不仁の君はあるまじきを、不仁なる君不孝なる子もよにあるは、いひもてゆけばものあはれをしらねばぞかし。されば物語は物のあはれを見せたるふみぞ、といふ事をさとりて、それをむねとして見る時は、おのづから教誡になるべきことは、よろづにわたりておほかるべきを、はじめより教誡の書ぞと心得て見たらんには、中々の物ぞこなひぞありぬべき。いはれたり。これまたいみじき論にて、今までのちうさくどもに、かけてもいはれぬ事なるを、此翁ぞはじめて見出られたるにて、いとおむかくめでたし。かかるにつけても玉小櫛は、此物語の注釈どもの中に、一きはぬけ出たる書なるを知るべし。

一部大事といふ事

紫家七論に、一部大事と標したる条ありていはく、冷泉院の御事、或はつくり物語なり。ふかく沙汰する事なかれといひ、或は子細ある事也としきりに是を秘し、或は此趣向の見にくきにて、一部の物語とりてだに見まほしからず、と申ともがらも侍り。ともに紫式部が本意をしらざるものといふべし。為章試に今案をしるして、識者の是非をまち侍るべし。とて、桐壺巻より次々、薄雲巻若菜巻などの語どもを引て、物のまぎれの事を論じて、伊勢物語に二条后、後撰集に京極御息所、栄花物語に花山女御、これらの御かたがた心ばせおもからずして、私のねぎことになびきたるなるべし。されどさいはひにしてものまぎれを御覧じえざる也。とて、もろこしの楚の幽王晋の元帝などが事を引出て云、これ他の国の事にてさへ心よからず。いはんや朝廷は皇神のさづけさせ給ひしより此かた、万世一系さらにまぎれ給ふことなきも也。す系の世に

いともやさしきさまにかきなし、終りにはいとおそろしく有まじきあやまちなりけり、とことわりたる気象を見よといひて、しひて諷論にせんとしたれども、さきにも薄雲巻を引ていへるごとく、源氏君此事を、後にはいとおそろしくあるまじかりける事とおもひしり給ひながら、其後もなほ朧月夜君に忍び忍び逢給ひしは何とかいはん。もし藤壺中宮の御事を、いとおそろしきあやまちなりとことわれる心あらば、其後にかかする事をまさに書べしや。もしはたして諷論ならむには、一たびはいましめながら、又立かへりてすすむるにぞなりぬべき。又みをつくしの巻にいはく、当代のかく位にかなひ給ひぬることを、思ひのごとうれしとおぼす。注「これは源氏君のおぼせるにて、当代とは冷泉院の御事也」もしかの論のごとくならんには、源氏君冷泉院の御位につき給へるにつきては、いよいよおそろしく思ひて、皇胤のまぎれぬる事を歎き給へるさまにこそ書べけれ。かやうに思ひのごとうれしとおぼすなどは書べきものかは。なほこの物のまぎれのかの説ども、あたためこと多けれども、かしこきすぢの事なれば、今はその弁へはもらしつ。かにかくに此御事、わきて諷論といふべきにもあらず。そもそも此物のまぎれは古今ならびなき大事にはあれども、物語は物語なれば、さる世の中の大事を、一部の大事として書べきにはあらず。これも物語にては、ただ物語の中の一つの事にぞ有ける。然らば此事はいかなる意にて書るぞといふに、まづ藤つぼの中宮との御事は、上にもいへるごとく、恋の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せむため也。そは男も女もよきことのかぎりをとりぐし給ひて、よろづにすぐれて、物のあはれをしり給へるどちの御うへといひ、又ことわりにたがへるあながちなるあひだの恋には、殊に今一きはあはれのふかきことある物なる故に、ことさらにわりなくあるまじき事のかぎりなる恋を、此御方々のうへに書出で、かたがた物

も女御更衣のうちに、心ばせおもからぬうちまじりて、帝系のまぎれもいできぬべしやと、遠くおもひはかりし諷論を見れば、式部は女なれども、其生質の美と学問のちからとうちあひて、識見おのづから大儒の意にひとしいふべし。又薰大将の事は天道好還の理をしめしたるおもむき、羅大経が筆に同じ。羅大経が筆とは、上に晋帝を論したる、鶴林玉露此一件が一の文の事なるを今はふきたり。本書を見るべし。この一件が一部的大事にして、講ずる人の意得あるべき事也。といひ、また或問をまうけて答へて云る事の中に、皇胤御一代にても、在原氏藤原氏などにまぎれあらんは、吾国の御為ものうき事にして、東海をふむ魯仲連ありぬべし。さるは藤壺に源氏の通ひて、冷泉院をうみ給ふは、誠にあるまじきあやまちにて、源氏姦淫の罪重しといへども、皇胤のまぎれおもはずなるかたにあらず。桐壺帝の御為には、正しく子なり孫なり、神武天皇の御血脈なり。伊勢宗廟其祀をうけ給ひ、天下の蒼生其まつりごとをいただき奉るべし。それすら猶冷泉院の御後をすてて、朱雀院を正統にかへせるは、いとも厳しき筆にあらずや。そもそも一旦人倫の乱あると、長く皇胤のまぎると、何れか重くいづれか軽かるべしや。断案をくだしがたしといへども、臣下の意にていはば、源氏の罪をしらざるまねして、皇胤のおもはぬかたならぬをよろこぶべし。式部が主意おしはかるべし。さしにも用意ふかき式部が、当時宮中にも披露する物語に、心得なくして書べしや。此作言諷論に心つかせ給ひて、いかにもいかにものまぎれをあらかじめふせがせ給ふべし。ようせずはうたがはしき事あらぬべし云々。とて、猶くはしく論じてすべて諷論と見たり。然るを玉小櫛に、又これを論じて云、冷泉院のものまぎれを諷論にとりて、一部的大事也として、そのよしを論じたるも、なほ儒者ころにして、ひたすらもろこしのふみどもの例にのみなづみて、物語のころをしらざるもの也。その論の中に、源氏君と藤壺中宮との秘事を、はじめには

のあはれの深かるべきかぎりをとりあつめたる物ぞかし。さて冷泉院のものまぎれは、源氏君の栄えをきはめんために書る也。そはまづいづれの物語にも、むねとしてよきさまにいふ人有て、その人のうへをいふとては、よにあらゆるよき事をえりあつめていふ中に、身のさかえは人の世のよき事のかぎりなれば、其人の万にさいはひ有て、つひにうへなき身となりぬる事などをいふぞ、物語の多くの例にて、此物語も源氏君の栄えをきはめてかかんとするに、人のさかえのきはまりは帝の御位にして、執政大臣といへども、ただ人はなほあかぬところある故に、太上天皇の尊号をかうふらしめんとするに、さるべきよしなくてはゆくりなく、まことに浅はかなるつくり事めくゆゑに、帝の御父とせん料に、此物のまぎれは書るもの也。そもそも此君、帝の御子にて、后と大臣とを御子にもち給へるうへに、帝の御父にてさへおはしますよしをもて、太上天皇になり給へる。かくてぞたふとくめでたき御身の栄えはきはまりける。なほ此尊号かうふらしめ奉ん料也といふあかしは、薄雲巻に、夜居の僧の此物のまぎれを、はやくよりしり居たるが、みかど院へひそかに奏せんとする時の詞にいはいはく、これはきしかたゆくさき的大事と侍ることを、過おはしましにし院きさいの宮、ただいま世をまつりごち給ふおとどの御ため、すべてかへりてよからぬ事にやもり出侍らん。かかるおいほうしの身には、たとひうれ侍りとも、何のくいか侍らん。私天のつけあるによりて、奏し侍るなり。広道云、本書ここに註ありてその弁あれど、長ければ今はかきつ。おのが考はかの巻にいふべし。かくて奏したることをきこしめして、みかどの此僧にのたまへる御詞にいはいはく、心にしらですぎなましかば、後の世までのとがめ有べかりける事を云々。ここに註は、又僧の申せる詞に、天変しきりにさとし、世中しづかならぬはこの気なり云々。よろづの事、おやの御世よりはじまるにこそ侍るなれ云々。註ありかくて次の文にいはいはく、いよいよ御がくもんをせさせ給ひつ

云々。一世の源氏、又納言大臣になりて後に、さらにみこにもなり、位にもつき給へるもあまた例ありけり。人がらのかしこきにごよせて、さもやゆづり聞えましなど、よろづにぞおぼしける。秋のつかさめしに、太政大臣になり給ふべきこと云々。註ありそもそも此物のまぎれの事、さきさきの巻よりつきつぎにいひ来て、ここにいたりて、源氏君を御位につけ奉らんとおぼしめしよりたるところへおとしたる、次第のおもむきをよく考ふべし。さて此君の栄えをきはめて書むとならば、今一きさみすすめて、帝の御位につけ奉るべきを、太上天皇にてやみぬること、作りぬしの深く心をつけたるもの也。そは狭衣物語に、かの大将をつひに帝にしたるは、此物語の源氏君をまねびて、今一きはすすめて書るものなるを、かの大将は、帝の位につけたるによりて、何とかやまことにつくりごよめて、そのよしなく、中々に浅はかに聞ゆるを、紫式部はそこをよく思ひたるものにて、帝の御位をばのこして、太上天皇もそのよしなくてはゆくりなき故に、桐壺巻に、こま人の相したる詞に、国のおやとなりて、帝王のかみなき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、みだれうれふる事やあらむ、とはじめよりまつしたがまへをまうけおきて、此物のまぎれをかきて、かならず尊号を蒙り給はではかなはぬさまにかきもてゆきて、薄雲巻に至りて、御位につけ奉らむとある所に、此君の詞に、故院の御心ざし、あまたの御子たちの御中に、とりわきておぼしめしながら、位をゆづらせ給はんことをば、おぼしめしよらずなりにけり。何かその御心あらためて、及ばぬきはにはのぼり侍らん、とある、これ帝の御位にのぼり給ふべきなれども、その一きはをば、ことさらにのこせりといふ、つくりぬしの下心を思はせたる詞にて、いともいとも心ふかき作りさま也。大かた此ものまぎれをかきたることは、此源氏君の栄えをきはめんため也といふこと、上件のおもむ

ても書のがるべきを、わが御国は、神代よりさる事なければ、いづれの御時にかとはかけれども、まさしくわが国の其世のさまをうつしたる趣なれば、たとひ嵯峨天皇に准へ、醍醐天皇に擬へ奉りたるにもあれ、時のみかどの御先祖にませば、むらいの罪さりどころなるべし。それも此漢さまの御制度なりし世には、何事もよろづおほらかになよびかにて、きはきはしく咎め給ふなどの事はあらざりし時にはあれど、つひには帝もみそなはさん物に、かくあるまじき事どもを、ものふかく用意ありし人の、つつまはずかかれたるにておもへば、心の底に思ふ事どもは、必ありしなるべし。さるは安藤氏のいへるやうなる意なりしか。そきはめてはいひがたけれど、大かた此一条のみは、諷論めきて聞ゆる中にも、かの柏木の物のまぎれは、まさしく其報を示したるにて、そのころむねと行はれたる伝説の趣によりて、因果を觀面に見せたる物なり。しかれどもしかげざとはかかずして、深くたどりて見ん人の心にまかせつつ、さる諷論めきたる筆つきをあらはさずして、人情のゆくままにかきまぎらはしたる、これやがて作りぬしの意にて、女の議論がまじきをつめるなり。なほいはば、此事は桐壺巻に、世の人光る君ときこゆ、またかややく日の宮と聞ゆとある所、伏案のはじめと見えたるに、この二つを対へ奉るをみれば、此物のまぎれの事、物がたりの中のむねとある事にて、其余の事どもは、皆これをまぎらはさんために、あやなしたる物のやうにさへ見ゆめり。されば此事のみは、猶作りぬしの意ありし事となんおぼゆる。そはいかなりし事を思へるにか、今実には知れがたき事なるを、しひていはんはかしこきわざなれば、おのれも又その論をばとどめつ。よく見ん人はよく見てよくさとるべくなん。さてかうやうに見る時は、小櫛の説はいかがしきを、かつがつここに弁へいはば、まづ源氏君、此事を後にはいとおそろしくあるまじき事と思ひしり給ひな

きどもをかむかへてしるべし。なほいはば、かの狭衣は、おほかた何事も此物語をまねびて、すこしづつ事のさまをかへて書る中に、大将の女二宮にしのびて逢奉りて、うみ給へる御子を、さかのぬんの皇子にしながら、まぎらはして後に、その御子を東宮にたて奉らんといふさだめある時、天照大神の御告によりて、つひに此大将を位につけたる事は、もはら此冷泉院の物のまぎれをまねびて書たる物なるを、それもかの大将を位につけて、栄えをきはめんためなること、此物がたりと同じ作りぬしの意也。さればかれをもてもこれをなすらへしるべき也。小櫛といはれたり。此二つの論いづれよからむ。皆作りぬしのしたに思へる事なれば、後よりおしきはめては、さらにいふべきよしはなきものから、既にかかる論どもの出来しうへは、ただにもえあらで、おのれが思ふむねをもいささかここに記しつべし。さて此二つの論のうちに、おのれはまづは安藤氏のいへるかたやよろしからんとぞおぼゆる。さるはかの七論のかきさまは、小櫛にいはれたるごとく全く儒者意にして、漢籍の例のみもて論じたる物にはあれど、作りぬしのしたの心は、いささか諷論めきたる事もありしにか、とおぼゆるよしもあればなり。その故は、此物語よりさきさきの物語も多かれど、帝の御妻にもものまぎれありて、其御中にうまれ給へる御子を、御位につけ奉り給へりなどいふ事は、絶てなく、大かた此物語ぞはじめなるべきを、但し今の世に伝はらぬあだし物語も多かりしと聞えれば、それらにはさることもありしかはしらねども、そはさだの外也。つらつら事の情をおして案ふに、作りぬしの在世のほどより、此物語ははやく宮中に流布したるさま、かの日記にしるく見えれば、人にもかつがつ見せられけんほどしられたり。さてしる人も見て流布したらんには、つひに帝も皇后も見給ふべき物なるに、かくめづらかにかしこきすぢをかかれたること、いとしも意得がたし。それはたもろこしのごとく、他し氏々の世といふ事あらばこそ、それになぞらへ

がら、其後もなほ臘月夜君に忍び忍び逢給ひしは何とかいはん云々、といはれたる、ことわりはまことにさる事なれど、これすなはち情を本として、物のあはれをむねとかけ、物語ぶみの体にして、あるまじき事とはおもひしり給ひながら、なほわが御心にもまかせかね給ひて、のどめづかよひ給へる趣なれば、これをもては論ずべからず。安藤氏のいへることは、げにもつきぎりなる儒者意と聞えれば、おそろしくあるまじく思ひ給ふ、とあるのみをもて、諷論といへるは、今少しあたらぬことなれば、それを弁へられたるはことわりなれど、かくいひつめては、これもまた議論といふべきさまにぞ聞ゆる。すべて諷論といふものは、その事とさしあてていふ議論のごとくにはあらでただ作りぬしの心の底にのみ秘たる事なれば、この巻にはかくいへり、その巻にはしか書きなごいふ、巻々の例などをもていふべきにはあらず。もししかつづつとさだかに跡あるほどならば、諷論とはいふべくもあらず。又其心得させんための人にだに聞ゆれば、其余の人には聞えざるも、なでふ事かあらんなれば、さらぬやうにまぎらはして、其事をつつむが諷論のならひ也。されば今となりては、いよいよ知れぬ事なれど、其世のさまとその事やらとを思ひて、作りぬしの心をおして、かうもやと思はんぞ、この諷論といふことの見やうなりける。あだし事どもは、此物語の中に、作りぬしの意を挟みていへる事あるを、ここかしこ引合せて考ふれば、大かたしらるる事なるを、かくにほはせてさとしたる事は、それにかかはるべき事にはあらずかし。然れどもかの蜚巻に、物語の心ばへをかける所に、その人のうへとてありのままにいひいづる事こそなければよきもあしきも世にふる人のありさまの、見るにもあかず、きくにもあまる事の、後の世にもいひつたへさせまほしきふしを、心にこめがたくて、いひおきははじめたるなり。とあるなどは、物語のすべてのさまをいへるなれば、

これらの証には引もいづべくや。さてまた小櫛に、みをつくしの巻に、当代のかく位にかなひ給ひぬることを、思ひのごとうれしとおぼす、とあるをも引いでいはれたる事も、しかおぼすは、大かたの人情のかたにつきて、しかおぼすべきさまの事を書たるなれば、証にすべき事にはあらず。又皇胤のまぎれぬることを歎き給へるさまにこそ書べけれ、といはれたれど、しかかかばやがて議論がましくなりて、いはゆる勸善懲悪などの体なるべし。諷諭と勸善懲悪とは、其すち異なる事なるを、大かた一ツことのやうに、おしくるめていはれたるは、ただかの儒者意をやぶらんとてのわざなるべけれど、いますこし細しからざるに似たり。さて又物語は物語なれば、さる世中の大事を、一部の大事として書べきにはあらず云々、といはれたるもいかが。おのれは中々に、さる世中の大事のために、一部の物語は書たるものやうにおぼゆる也。さるはあだし物語どもは、させるふしもあらねば、いはれたるやうに、一部の大事などを思ふべきにはあらざれど、此物語は一ふしやうかはりたるに、此物のまぎれの事ばかりは、いたくめづらかなる事にて、かいなでの物語どもの例をもていふべき事とはおぼえねば也。また諷諭などいふ事は、大かた儒者意にはあなれど、此作りぬし、みながら漢籍を見ぬ人ならばこそあらめ、すでに文法なども漢文に似たる所ありて、あだし物語とはこよなくかはりたるにて思へば、あながちに彼にならへるにはあらねども、さることおもはずとは定めがたくやあらん。されどこれは、かの諷諭のかたにひかるひが心にもあらんか。とにかくに証なき論なれば、しひていふべくもあらず。さて又ことわりたがへるあながちなるあひだの恋には、殊に今一きはあはれのふかきことある物なる故に、ことさらに云々といはれたるは、一わたりさることに似たれど、それも事からよるべき也。かく皇胤のまぎれぬばかりの事をしも、とりたてて書ず

とも物のあはれのふかきことはいくらもあらんを、殊更に此御かたがたのうへにしもかかれたるは、別に心あるものに似たり。なほいはば、宇治の巻々などは、かくあるまじき事のかぎりをばかかれたらねど、ものあはれのせちなることは、今すこしまさりて聞ゆるをもても、あはれのかぎりには、あながちに上なき御かたがたのうへならでも作りぬしの心にて、つくして見せんもやすかるべくなん。さてまた源氏君の栄えをきはめんために書る也、といはれたることどもは、殊にいかにぞや聞えたり。人の栄えのきはまりは、帝の御位にして、執政大臣といへども、ただ人はなほあかぬ所ある故に云々といはれたれど、それもまた事からよるべき也。そもそも他の国の帝などならばこそ、帝の御父とせん料になど、意にまかせてもかくべけれ、これはかの薄雲巻に、冷泉院の帝の先例をかながへさせ給ふところにも、「もろこしにはあらはれてもしおびても、みだりがはしき事いとおほかりけり。日本にはさらに御覽じうるところなし。たとひあらんにても、かやうにしのびたらん事をば、いかでかつたへしるやうのあらんとする。とあるごとく、我御国は神代よりうごきなき御くらぬなるを、いかに空言物語なればとて、かくおふけなき事のかかるべしや。それよく心得たる人なればこそ、かくさまにいへるにはあれ。さらばいよいよことに意あるに似たり。栄えのきはみをかかんとて、執政大臣などにしなしたりとも、そのかかんやうにて、栄えのきはみとは聞ゆべければ、何のあかぬことかはあらん。よしや帝の御位のぼり給ふさまにかけりとも、かうあるまじき御中のゆゑならでも、のぼり給ふべきやうは、前にいくらもあるべし。しかるをかくおそろしき事の故にて、太上天皇の尊号得給へるやうにかきなしたるは、子細あるべき事なりかし。さてまた薄雲巻に、夜居の僧の此事を帝へ奏する所の語どもを引て、尊号かうふらしめ奉らん料也といふ証とせられたるは、

げに其料とは見えたれど、これによりてただ栄えをきはめんための料のみとは見えず。されば其語を注せられたるおもふきも、本文の意とは異なるやう也。おのれが考はかの巻にいひて、そこに件の説を弁ふるを見るべし。此一条をすべて、源氏君の栄えをきはめんための料也、といはれつれど、さがかりには見えず。源氏君の栄花のさかりは、藤末葉巻にて、何事もみな御心のままなりたるさまにかきて、前の巻々に見えたる事どもはてを結び、さて太上天皇に准へ給ふ事をいひ其次に六条院へ行幸の事ある、これを栄えのさかりのきはみをかかれたる所とぞ見ゆめる。其次の若菜巻に、四十の御賀の事の見えたるも、栄えのきはみの事にはあれど、かの巻は既に女三宮の事より、巻の始を書出られたるは、柏木の物のまぎれの伏案にて、衰にむかふ始なれば、此巻よりは衰へがたをかける物と見るべし。それより女三宮の事いできて、つひに薫君生れ給ひ、右衛門督うせ給ひ、落葉宮の事あるまで、皆源氏君の御心をくらしめ給ふ事のみなれば、よきかたの事にはあらず。さてつひに御法巻に、紫上のかくれ給へる、これ悲哀のきはみなるに、幻巻はそのかなしひの事のみをかかれたれば、すべて源氏君のうへに、栄えばかりをかかんと構へたるにはあらざる事をするべし。もし源氏君の栄えをのみ物せんとならば、かかるわるきかたの事をばはぶきて、紫上の事も雲隠のうちこめ、柏木のくだりもことよくのがれ給へるさまにかくべき事なるを、かくあしきかたの事をもかけるは、みなかの物のまぎれの報応を示せるものなるべし。さてつひに源氏君の御末の栄えは、夕霧大臣のかたにとどめ、桐壺帝の御末々、朱雀院の御子のかたに定め、致仕大臣の末は、紅梅大臣にとどめたるも、安藤氏がいへることく、作りぬしの用意ありし事なるべし。さてまた太上天皇にてやみぬること、作りぬしの深く心をつけたるもの也とて、狭衣の事を浅はかに聞ゆといはれたるも、

桐壺巻の相人の事も、薄雲巻の照応の事も、皆いはれたるがごとくにて、つゆもいふべきふしなし。但しこれもただ栄えをきはめんためのみなるやうにいはれたるばかりはうけがたし。又かの狭衣を引て、かの大将を位につけたる事にならずへて、栄えをきはめんためなることをしれ、とやうにいはれたるもいかが也。げにかの物語は、此物語をうつせるものにて、其例を思ひたる事勿論なれど、かの大将をつひに位につけたるにても、まぎらはしきを省きすてたる、作りぬしの意はしるきにはあらずや。そもそも氏姓を賜はることは、御臣となり給へる事のしるしなれば、一たび氏姓を賜ひては、ふたたび皇子となりて、大御位を嗣給ふべくはあらぬことわりなれば、いとしも上つ代には、絶てなき事なりにけるを、後にさる例の出来しは、さるべき皇子たちのおはしまさで、やむことを得給はざりし時の例なるを、其例を例として、いかさまにも作るべき物がたりぶみに、あながちにかくべきやうやはある。然れどもまほならぬ皇子たちの、もしさる故ありて、御位につかせ給ふ事などあらば、それこそは御臣に下り給へるを、かへし給はんにはおとりたるらめ。よしや世人はしらずがほつくととも、天照大御神の何とか見給はんとすらん。狭衣の作者の、そこをおもへる故ありて、大御神の御告によりて、かの大将を御位につけたるは、げにいとさるべきことわりにて、此物語の天変の事、又冷泉院の御後をたちたるなどと、もはら同じかきさまとこそおぼゆるなれ。されどかうやうの事どもは、皆つくりぬしの心のそこにありし事にて、誰かはその実を知るべきなれば、七論も玉小櫛も、共にいたづらなる論にちかく、今かく弁へいふことも、猶ただ同じおしはかりことなれば、これかれともにいたづらごとといふべくなん。後の見ん人おのがじし心々にえらびてとりね。さてまた此論どもを見て、もし安藤氏が説を、げにおもふ人などあらんに、かの諷諭の旨をなほもいは

んとて、この作りぬしの御世さまの事を引あてて、試に論ずる類、ゆく
さきにも必あらんと思ふを、それはいとひがことなれば、さらに思
ひかくることなかれ。そもそも我皇国のならはしは、たとひかしこき御
あたりに、いかやうの御事あらんにても、けざけざとあらはして、其よ
からぬ事をいふなどは、かけてもあらぬことなるを、後世にいたりては、
憚なくいひちらす類も出来しは、皆もろこしさまのならはしのうつれる
にて、いともいともかしこきわざなれば、ゆめゆめ此うへの事をいふべ
からず。もしさる推量の事どもをいはんとならば、広道らもいと多くい
ふべきを、かくてのみさしおくは、わが大御国ぶりの御おもむけにした
がひ奉るものぞ。かへすがへすもくちさがなき事をないひそとよ。但し
物によそへなどしていふ事は、昔より例ある事なれば、この作りぬしの
心ありげに見ゆる事ばかりを、事のついでにあげつらへる也。さればた
だ子細ありし事なりけん、とのみ見てあるべし。あなかしこ。